

展示室で展示解説をしていると、来館者から「タイムマシンがあったらすぐわかるのにね」という感想を幾度となく聞いた。確かにタイムマシンがあれば、過去の歴史を頭の中で考えなくて、実際見に行けばそれで解決する。そうすると、過去を考える「考古学」という学問は、過去を見る学問「見古学」となり、当然、私たち学芸員は失業してしまうに違いない。



ところで、「タイムマシン」と言えば、私は真っ先に『ドラえもん』のタイムマシンを連想するのだが、タイムマシンの初出は、イギリスのH.G. ウェルズが1895年に書いた小説『タイムマシン』であることは多くの人が知るところであろう。私自身中学生ぐらいの時、この小説を読んだことがあるが、80万年後のアロイ人たちの生活する未来がさほど輝かしいものでなかったことに、少し落胆した記憶がある。

その後タイムマシンは、数多くの映画など多くの作品に登場してきたが、最近、ふと感じた事がある。タイムマシン作品の多くは、未来を旅するものより、過去を旅するものが多いのでは、と。

『ドラえもん』におけるのび太は、終わっていない宿題や忘れ物などの失敗を取り戻すため、過去に戻る。映画『ターミネーター』『バックトゥザフューチャー』なども同様で、多くの作品は、主人公自身の現在おかれている窮状を打破し、過去を修正するためにタイムマシンが登場する場面が多いような気がする。それはつまり、我々は漠然とした未来を見ることよりも、自身が置かれている「今」を生きることがより切実で重要な問題だと考える傾向にあるからではなかろうか。

話は再び変わるが、考古博物館で働いていると「考古学という学問は、何のために存在するのか。」という質問をよく受ける。大変難しい質問であるが、答えを敢えて一言で言うと「過去を知ることにより、今の我々の生活をよりよきものにするために存在する。」と私は考える。考古学によって、遺跡から得られる過去の自然災害の痕跡、限られた資源の中で生活を営んできた先人の知恵、戦争の発生を抑制するために過去の戦争や抗争のメカニズム等々…、考古学から得られる情報は、自然災害・飢餓・戦争といった、現代が直面する数多くの深刻な問題に対して、それらを解決するための一助となり得るのである。

このように考えると、考古学と過去に向かうタイムマシンの役割は、「過去を振り返り、現在の我々の生活をよりよきものにするため」という点で非常に似ているように思える。ただし、タイムマシンは現在のところ実在しないので、考古学こそが現代のタイムマシンだと言える。私たちは、タイムマシンには乗れないが、考古資料を駆使して過去を振り返り、今を生きるための情報を得ることができる。

西都原考古博物館の展示室に向かうスロープの展示には、こう書いてある。

「たとえば鏃。

この獲物を獲得するための大切な生活の道具を、  
何故、人は人に向けて引き絞るようになったのだろうか。  
この深刻な問題を解く鍵を、考古学に求めたとしても、  
決して失望することはしないだろう。」



今の生活をよりよいものにするため、未来の生活を夢見るよりも、西都原考古博物館で少しだけ考古学に身を委ね、過去を振り返ってみませんか。決して失望することはないと思いますから。

(甲斐貴充)